

## 『ベスティアリウム』と記憶術

——ピアポント・モーガン・ライブラリー M832 番写本をめぐる一考察——

長友瑞絵

### 1. はじめに

『ベスティアリウム *Bestiarium*』とは、12 世紀から 13 世紀を中心に、西洋中世に広く流布した動物寓話集の総称である。その内容は、実在の動物だけでなく、幻想の動物の性質とその寓意が語られる短い話の集成となっている。『ベスティアリウム』のテキスト自体は中世のオリジナルではなく、古代に著され、すでに中世の西欧全体に流布していたキリスト教的博物譚『フィシオログス *Physiologus*』（「自然認識者」の意）を中核とし、百科全書などからの引用を加え 12 世紀頃成立したとされている<sup>(1)</sup>。テキストについては文献学的に様々なヴァージョンの存在が確認されており、聖書に次ぐ普及を見たとも言われるが、それを示すように、多数の美術作品において図像の利用が確認される。例えばブルジュ大聖堂のステンドグラス（13 世紀）では、新旧の聖書場面と並び、自らの胸を突き、流した血で死んだ雛を生き返らせるというペリカンや、死んだ仔ライオンに息を吹きかけて生き返らせるというライオンの図像が見られ、共にキリストを象徴している。

ベスティアリウム写本自体は多数伝存しており、総数約 500 点と推定され、そのうち挿絵入りのものも少なくとも 100 点近くは確認される<sup>(2)</sup>。先行研究については、文献学的研究が大半を占め、挿絵の展開と伝承のプロセスについては、未だに十分な考察が行われていない。筆者は博士論文において『フィシオログス』写本と『ベスティアリウム』の初期写本を取り上げ、挿絵の伝承について考察したが、その際新たな問題が提起された。それは、とりわけ 12 世紀以降、テキスト・挿絵サイクル共に特徴を備えた複数の写本群が派生しているものの、先行研究においては、各写本群の特徴

の生成理由や機能については殆ど検討されていないということであった<sup>(3)</sup>。

そこで本稿では、この時期派生したクリュソストモス版テキスト (*Dicta Chrysostomi* version 通称 DC ヴァージョン)<sup>(4)</sup> の写本群のうち最古級の写本、ピアポント・モーガン・ライブラリー所蔵の M832 番写本を中心に取り上げ、『ベスティアリウム』の機能について注目しつつ考察したい。以後この写本をモーガン本とする。同写本は、写本の構成や挿絵の形式上、先行写本とは異なる特徴を備えており、単に教訓的読み物であることを目的としたとは考えがたいことから、『ベスティアリウム』と記憶術という新たな観点も含め考察を進めたい。

## 2. モーガン本の概要

モーガン本は 12 世紀半ば頃、ウィーンの西 70 キロ、ドナウ川沿いの都市クレムス近郊ゲットヴァイク修道院で制作されたと推定されている。フォリオの大きさが縦 28.6、横 20.3 センチと、A4 版大のこの写本は、10 葉 (つまり 20 ページ分) という小規模な形で現在に伝えられている。その最初のフォリオ 1 (表裏) には、ラバヌス・マウルス著『言語の発明』からの抜粋があり、続くフォリオ 2 表面からラテン語の『ベスティアリウム』が収録される。フォリオ構成を見ると、テキストは一段組みで、挿絵は基本的に各章の冒頭にあり、テキストが数行減らされて作られたスペースに組み込まれる形でコンパクトに描かれている。大きさとしては小さい写本であるものの、拡大して見ると褐色のペン素描には朱赤、緑や淡い紫で彩色や影が施されており、羽毛や獣の毛一本一本まで描く熟達した表現が確認される。例えばフォリオ 4 裏面「サル」の挿絵では、うづくまるサルの微かな体毛までが描かれ、フォリオ 6 表面「太陽トカゲ」の挿絵では、トカゲが小さな建物から顔を出す様子が描かれるが、建物の格子には薄紫色のハッチングで影が付けられているのである。テキストコラムに入り込む形のモーガン本の挿絵は、先行作例である《ベルンのフィシオログス》(830 年頃、ベルン市立図書館 Cod. 318) や、ボードリアン・ライブラリー所蔵の初期『ベスティアリウム』(1110-1130 年頃、オックスフォード、ボードリアン・ライブラリー、MS. Laud Misc. 247) の挿絵形式と比較すると、枠取りや余白による背景の空間は排除され、図式的

な印象を与える。

このように概観すると、モーガン本は『ベスティアリウム』の簡素な挿絵入りの一写本として看過されてしまうものかもしれない。しかし挿絵だけでなく、その他の側面からも同写本を分析すると、更に他の特徴が浮かび上がる。それはまず第一に、収録される動物主題のオーダー、つまり順序の変化である。

筆者はモーガン本と、その直系の祖先とされる『フィシオログス』Bバージョンのチャプター構成の比較を行なった。モーガン本に収録されるDCバージョンのテキストは全28章から成っている。構成上の特徴としては、最初のチャプターが「ライオン」から開始する点は『フィシオログス』と共通している。しかし『フィシオログス』では、火打石、ノコギリ魚、カラドリウス（鳥）が続いているように、動物や鳥類、爬虫類、植物などが混ざりあって並び収録されていたのに対し、モーガン本、すなわち『ベスティアリウム』DCバージョンでは、各章はおおよそ生物学的分類に従って並べ替えられている点が大きく異なっている。冒頭にライオンをはじめとする四足獣が置かれ、続いてマムシなど爬虫類、シカ、キツネなど中小の動物、最後にワシなど鳥類がまとめられ収録されている。

第二の特徴とは、特にこのモーガン本には、『ベスティアリウム』の内容とはおおよそ関係のないものが収録されている点である。先に見たように写本冒頭のフォリオ1表裏には、カロリング朝期を代表する神学者で知識人であったラバヌス・マウルス（780年頃-856年）による、文法に関する著作『言語の発明』からの抜粋が収録されているが、そこには5種類ものアルファベットが記されている。また『ベスティアリウム』最後のチャプター、「フェニックス」下の空白（fol. 10v）には、花形文を中心に置いた、11の周回路を持つラビリンスが描かれているのである。このうちアルファベットについては、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語、スキタイ語、さらにルーン文字であることが判明している。これらの文字は、一見すると恣意的なメモのようにも見える。しかし、こうした学習を目的としたテキストが『ベスティアリウム』と同じ写本に収録されている事実を、先行研究で言われているように単に好奇心から偶然に収録されたものと見なして良いのだろうか。

『ベスティアリウム』がヨーロッパ全体において中世を通じ長く人気を博した理由

について、先行研究では、聖職者による説教作成の材料となったことや<sup>(5)</sup>、修道院内での学習のための書物として多く所蔵されたことが指摘されるのみで、具体的なことについては言及されていない。また『ベスティアリウム』写本の所蔵状況を見ると、画像の使用について厳しい態度で知られたシト一派を含め、すべての会派に及んでいることが確認されることから、より実的な機能について考える必要があるだろう。そこでその手掛かりとして発表者が取り上げたいのが、記憶術との関係である。

### 3. 『ベスティアリウム』分析 —— 記憶術との関係から ——

『ベスティアリウム』と記憶術の関係については、中世文学・言語学研究側からローランド (Rowland 1989) およびカラザース (Carruthers 1990) によって、わずかながら言及がなされている<sup>(6)</sup>。特にカラザースは動物寓話集が中世の教育にもたらした最大の功績について、記憶のための心象すなわち、「絵」を体系的に作りあげることにあると明言した。

中世文化における記憶の役割や記憶術について論じたその著書の中で、『ベスティアリウム』、つまり動物寓話集について、内容が子供向きで娯楽的な要素が強いにもかかわらず、ヨーロッパのほとんどの修道院の書庫に備えられていた、という状況について、次のように述べている。

動物寓話集は学生を楽しませ、その興味をそそるとい役目のほかに、記憶の補助手段という貴重な役割を果たしていた。つまり、教育という生涯プロジェクトにおいて、常に貴重な価値をもつ、一定の秩序をもつ記憶の「土台 (ロキ)」、すなわち記憶上の場所 (ロキ) の役割を務めていたのである<sup>(7)</sup>。

『ベスティアリウム』が記憶上の場所、という役割を務めていた、とは、どういうことなのか。これは最古の記憶術の技法とされる「場所法」に関わっていたというものである。

この最古の記憶術である「場所法」についてであるが、記憶術に関する古典文献に

よれば、「イメージ／表象」(imagines)と「場所」(locus)を使用する技法とされる<sup>(8)</sup>。キケロの『弁論家について』の中で、前5世紀のギリシアの詩人シモニデスがこの記憶術の原理を発見したいきさつが記されている。シモニデスは、ある日スコパースという貴族の晩餐会に招待され食事を共にしていたが、途中で邸宅の外から人に呼ばれ建物を出た。すると、ほどなくして邸宅の天井が崩落し、主人のスコパースをはじめその親族・客の全員が死亡するという事件が起きた。残された親族が彼らを埋葬しようとしたが、押しつぶされた死体がどの人物か判別がつかず途方に暮れていたところ、シモニデスがどの人がテーブルのどの席についていたかを思い出すことができ、一覧表を作成することができた、とされる。そしてシモニデスはこの経験により、鮮明な記憶というものが、順序や場所と関連付けられた場合であることを発見したのである。

以上、最も歴史が古く基本的な技法である場所法を再度要約すると、まず何かの場所を選び、次に、記憶したい事物のイメージを描く。最後に、それぞれの場所に関連付けていく方法、ということになる。中世においては、この場所法を源とする初歩の記憶術のシステムが聖堂や修道院の附属学校で大いに利用された。ただしそれは記憶の場所が空間的な建物に結び付けられていた古代とは違い、学習者にとっても理解が容易な、数字やアルファベットの順序を土台(つまり場所)として、記憶を1枚の平面のように捉えるものだったという。

『ベスティアリウム』写本が多数制作されたまさに12世紀前半に活動した、キリスト教神学者サン・ヴィクトルのフーゴーは、その方法を自著『編年史』序文の中で解説している。フーゴーは、「背景」に「イメージ」を配列する場所法と類似した心理原理を利用したシステムを説明している。ただしここでは、「背景」となるのは番号で、その番号を振った背景に、テキストの断片を「イメージ」として、グリッド(碁盤目)に埋め込むように書き込む、ということになる。なおそのイメージには、記憶する土台となった写本の装飾文様やその色、注釈、ページのどこに位置していたかまで、そのまま刻み込まれているという<sup>(9)</sup>。

そしてカラザースによれば、『ベスティアリウム』は、数字やアルファベットで作られた記憶グリッドにつける目印(マーク)として、利用されていたとされる。記憶した事柄を整理する際、数字やアルファベットは多く使用されていた。しかしこの場

合、一つの場所に詰め込み過ぎて意味不明となってしまうと都合が悪いため、さらに他に何組か、そうした「場所＝ロキ (loci)」が必要となる。また過密を避けるためには、形の異なるアルファベットのセットが二組以上必要とされていた。使用法の1つとしては例えば、ワシ (aquila) のイメージの A、フクロウ (bubo) のイメージの B という形で『ベスティアリウム』をもとに一連のアルファベットのセットを作ることができたと推定される。

なおこの記憶システムについて言及していると思われる記述も、時代が下るとはいえ残されている。15世紀のイタリアの法学者ラヴェンナのペトルスによれば、自分の記憶の場所はアルファベット順に並んでおり、アルファベットの19文字に、聖俗ふたつの世界の法典から抜き出した、二万もの項目を取めたという。またその際、普通のアルファベット文字の他に、「その代わりに人の形をした文字を使い、生き生きとした鮮やかなイメージを作るのに成功した」と述べている<sup>(10)</sup>。ここで鮮やかなイメージ、つまり、記憶に残りやすいような印象の強いイメージを作るため、普通のアルファベット文字ではなく、人型の文字を使用したことが重要となる。ペトルスはさらに、時に魅力的な女性の形をした文字も「記憶を大いに刺激する」ので効果的とも述べているのである。

このように、記憶作業のいわば土台となるアルファベットには、様々な補助によるアレンジが必要だったのであるが、その際補助として、黄道十二宮（いわゆる12星座）のシンボル<sup>(11)</sup>や、『ベスティアリウム』を素材とし作られた『動物の特性 *voces animantium*』が使用されていたという<sup>(12)</sup>。『動物の特性』とは、「メンドリは笑う」など、各種の動物寓話集から収集された動物の特長をまとめた言わばリストであり、挿絵はなく一定の順序で配列されていたとされ、記憶作業に利用する目的で、その下準備として学生達に記憶されたと推測されているものである。

以上のように、『ベスティアリウム』と記憶術との関連を想定すると、モーガン本に見られた特徴について実際的な意味が浮かび上がるだろう。つまり先に見たように、アルファベットも『ベスティアリウム』も、記憶の保管場所を築くための材料となるものであったのであり、これらをまとめて一写本に収録することが便宜上必要だったと考えられるのである。記憶作業用のイメージには、醜悪、美しさ、滑稽など、いず

れも極端なものが望ましく、感情の強い反応が引き起こされるものでなければならぬ、とされていることから、様々なめずらしい性質や外観で読者を惹き付ける動物の物語集は、まさに条件に合致したものであった。

したがってモーガン本の特徴を記憶術という側面から分析するならば、その機能とは、自然物に関するキリスト教的寓意の絵解き本というレベルから一段上がり、記憶の補助システムへと加工された写本群として存在している可能性が考えられるだろう。

#### 4. まとめ

以上モーガン本に見られる特徴について、挿絵のみならず主題オーダーや、さらに記憶術という点から分析したが、なお時代を遡り、9世紀、修道院文化の拠点として栄えたスイスのライヒェナウ修道院で制作された写本には、数種のアルフアベットやラビリンスなど、モーガン本と非常に類似する図像が含まれていることについても最後に言及しておきたい。写本学者ビショップによれば、他言語のアルフアベットが収集された類似する写本は、9世紀から11世紀に見られるという<sup>(13)</sup>。ザンクト・ガレン878番写本(p. 321, 277)には、モーガン本と類似するアルファベットやラビリンスが確認される。同写本は様々なテキストの抜粋を集めたアンソロジー写本で、元はカロリング朝を代表する教会著作者で詩人であったヴァラフリド・ストラボ(808年頃-849年)の個人的な手帖であったと伝えられている。ここでアルファベットは文法に関するテキストと共に収録されていることから、この写本が作られた9世紀には、アルファベットを利用した記憶術自体はすでに修道院で利用されていたことが推測される。しかしながら一方、この写本には『ベスティアリウム』のような動物寓意集関係のテキストは収録されていない。同時期には、『ベスティアリウム』の祖先にあたる『フィシオログス』が流布しており、数は少ないにせよ挿絵入り写本も伝来していたはずである。しかし、これらの『フィシオログス』写本には、文法に関する著作ではなく、聖人伝など神学的著作が共に収録されているのである。こうした傍証からおそらく、場所法の記憶術はカロリング朝からあったものの、『ベスティアリウム』が記

憶術のための補助手段として用いられるようになったのは、モーガン本が制作された12世紀周辺になってからのことだったのではないかと筆者は推測している。モーガン本をはじめとするDCバージョンの写本群とは、12世紀の修道院文化の活発化やキリスト教神学の体系化なかで、独自に発展したものと位置づけられるだろう。

以上のように、モーガン本の分析を通じて、12世紀における修道院の知的文化の変化を背景に、記憶術が『ベスティアリウム』と繋がり持ち、独自の挿絵形式や、挿絵サイクルを持つ写本群の展開への一つの推進力となった可能性が考えられた。実際には、テキストの系譜に見られるように、12世紀以降DCバージョンだけでなく、フランス語系統の写本やイングランドの系統の写本など、『ベスティアリウム』には様々なバージョンが派生し展開を見せていることから、今後、先行研究では考慮されてこなかった「記憶術」との繋がりも観点に加え、これらの写本群の再検討を進めたい。

註

(1) テキストの系譜と各バージョンについては以下にまとめられている。McCulloch, Florence, *Mediaeval Latin and French Bestiaries*, Chapel Hill, University of North Carolina Press, 1962; Henkel, Nikolaus, *Studien zum Physiologus im Mittelalter*, Tübingen, Max Niemeyer, 1976; Muratova, Xenia, “Bestiario,” *Enciclopedia dell’arte medievale*, vol. II, Rome, Istituto della Enciclopedia italiana, 1991, pp. 442-457.

(2) Muratova, Xenia, *op. cit.* p. 442. 挿絵入りベスティアリウム写本の総数については筆者の調査に基づく。

(3) 長友瑞絵「『フィシオログス』写本挿絵の研究——挿絵サイクルの伝播をめぐって——」東京藝術大学博士論文、2017年。

(4) DCバージョンとは、テキストに記された著者の名前、ヨハネス・クリュソストモス (Ioannes Chrysostomus, 「金口のヨハネ」の意) にちなみ、“*Dicta Chrysostomi*” という通称で広く普及したテキスト系統である。この人物自体は4世紀のコンスタンチノーブル主教であり、名説教で知られたことからこの俗称で呼ばれた。しかしDCバージョンの著者としての信憑性は低く、実際の著者は不明であり、その成立は1000年頃のフランスと推定されている。収録編数は約27編でやや少なく、『フィシオログス』の初期のラテン語版 (Bバージョン) から抜粋して編集さ

れたと考えられる。

- (5) Morson, John, "The English Cistercians and the Bestiary," *Bulletin of the John Rylands Library*, vol. 31, 1956, pp. 146-170.
- (6) Carruthers, Mary J., *The Book of Memory: A Study of Memory in Medieval Culture*, Cambridge, Cambridge University Press, 1990. (メアリー・カラザース『記憶術と書物：中世ヨーロッパの情報文化』(別宮貞徳 監訳、柴田裕之／家本清美／岩倉桂子／野口迪子／別宮幸徳 訳)、工作舎、1997年)；Rowland, Beryl, "The Art of Memory and the Bestiary," Clark, W. B. / McMunn, M. T. (eds.), *Beasts and Birds of the Middle Ages*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1989, pp. 12-25.
- (7) カラザース, *op. cit.*, p. 185 より引用。
- (8) 記憶術の祖とされるのは、前5世紀頃に活躍したギリシアの叙情詩人シモニデスである。彼自身の著作は失われ伝来していないものの、後の前55年頃キケロが著した『弁論家について』の中で、記憶術を発案し使用した人物として挙げられ、その具体的内容が記されている。この他にも、シモニデスが考案した記憶術を説明した書物として伝キケロ著とされる『ヘレンニウス修辞書』(*Rhetorica ad Herennium*, 前80年頃)と、クインティリアヌス著の『弁論家の教育』(*Institutio Oratoria*, 88年頃)がある。詳細については、上述のカラザースと共に、ヨーロッパ思想史における記憶術の基礎文献であるイエイツを参照されたい。Yates, Frances A., *The Art of Memory*, London, Routledge & Kegan Paul, 1966. (フランセス・A・イエイツ『記憶術』(玉泉八州男 監訳、青木信義 / 井出新 / 篠崎実 / 野崎陸美 訳)、水声社、1993年)
- (9) カラザース, *op. cit.*, p. 140-141.
- (10) カラザース, *op. cit.*, p. 184, Petrus Thommai (Peter of Ravenna), *Foenix domini petri ravenatis memoriae magistri*, Venice, Bernardinus de Choris de Cremona, 1491.
- (11) 黄道十二宮の図像として例えばカロリング朝時代の作例(『アラテア』より p. 515「黄道十二宮」、9世紀末、ザンクト・ガレン修道院図書館、Cod. 250)を挙げたい。古代の天文学写本はカロリング朝文化に継承され、中世を通じて星座図像を含む挿絵入り写本が多数作られた。アラトゥス著の天文学詩『アラテア』には黄道十二宮以外の南北天球の星座についても挿絵が残されている。越宏一『星座図像の研究——「アラテア」写本を中心に』(研究代表者 越宏一)、平成16-17年度基盤研究(B)(2)(研究課題番号16320019)研究成果報告書、2006年。
- (12) McKitterick, Rosamond, "Migrations and the written word in the early middle ages," Borgolte, Michael / Julia Burkhardt / Marcel Müllerburg / Paul Predatsch / Bernd Schneidmüller (eds.), *Europa im Geflecht der Welt: mittelalterliche Migrationen in globalen Bezügen*, Berlin, Akademie Verlag, 2012, pp. 71-86.
- (13) Bischoff, Bernhard, "The Study of Foreign Languages in the Middle Ages," *Mittelalterliche*

『ベスティアリウム』と記憶術

*Studien*, vol. 2, Stuttgart, Hiersemann, 1967, pp. 227-245.